神奈川県立生命の星・地球博物館
友の会通信
Vol.8, No.1, 通巻 43 号 2004.4.17 発行

濱田会長講演会…1
フェスタ特集…2
身近な自然シリーズ…4
植物観察会…6
地学グループ…7
サロン・ド・小田原…8
行事予定, 情報クリップ…9
目 次

『博物館友の会・白書は可能か？』

友の会会長　濱田隆士

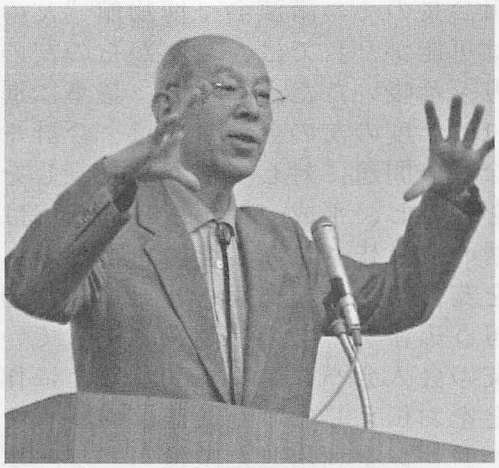
神奈川県立博物館は、創立以来 30 年を超える歴史をもち、以来、自然誌系と歴史系とが一体となった運営を通してきた。それ故に、友の会の結成はできなかった。以来、自然系部門が小田原の地に誕生し、ようやく“友の会”が機能するようになってきた事実は、とても重要である。

さて、生命の星・地球博物館“友の会”には、正式に県立の肩書きはない。館の特性や目的に参集した誠意と善意のボランティア集団である。文部科学省からは毎年のように国からの委嘱事業が公募され、生命の星・地球博物館はこれに賛同して何がしかの県費でない経費を受けて活動しているが、“友の会”は主体とはなり得ていないのである。“友の会”の在り方は全国的に眺めても大変不安定であり、それがない場合やNPO法人化したもの、活発に機能しているケースなどがある。

生命の星・地球博物館の場合をとりあげてみよう。会長には不肖小生がその任を負っているが、必然的に様々な制約があり、とりわけ不況の中経済的な面で、ほぼ会費が通信費で消化されてしまう現状は頭が痛い。前館長であるという立場には十分な敬意が払われているが、会員が東京など県外の人々も少なくない構成で、500 名を超えていることが、一番大きな課題ではあろう。

館自体の学芸員の有志の方々には、時により場所を選んでいろいろ“お手伝い”をしてもらうことも少なくない。もちろん、県費をこれに当てることはできない。講師を外にお願いしても限度というものがある。野外活動には参加者の人数にも制限があり、催事者が事故のないような配慮をするのも大きな苦労の一端である。

全国的な視点でこのような例を見ると、やはり同じ悩みを持つ所は多く、活発なケースはむしろ稀である。外国では、元館長や元館員の善意によるガイドもあって、羨ましい限りである。わが国で、どのように博物館“友の会”を成立させるかは、母体である博物館自体の多様性が大きいことに加え、“友の会”のメンバーは「自由意志」の集団であることも、活動がついに全般にわたらない悩みがともなう。



友の会を熱く語る濱田会長

このような事態の解決には、何が有効かを考え、検討し、合意を得ることが不可欠であろう。学芸員等のさらなる協力も欠かせまい。そこで、一案として、これまであまり考慮されてこなかった局面としての、“友の会”白書というケースが浮上してくる。もちろん前例はない。政府等公な機関からは、白書として良い言葉が並ぶ。要は行動であり、ハンズ・オン型思考をベースにすることであろう。

生命の星・地球博物館は 2005 年に創立 10 周年を迎える。10 年という節目を目前にし、博物館“友の会”白書を皆で真剣に考えてみようではありませんか。問題点を羅列するのでも良い。とにかく当たって砕けろの姿勢が肝要なのです！

友の会NOW
平成15年度総会報告と次年度への期待

平成15年度友の会総会が3/20（祝）に開催されました。今年はミュージアムシアターで行い、300名収容の会場で会員の方が何人来ていただけるのか？ちょっと不安でしたが、ミューズ・フェスタ2004のオープニングも手伝って、例年に比べ多くの会員の皆さんが参加されホッとしました。(会員出席65名)

濱田会長のミニ講演会「博物館“友の会”白書は可能か？」では、これからの友の会の在り方を示唆いただきました。議事に進み、平成15年度の友の会運営では、会計や通信発送などの問題に対して様々な見直しをしたことを報告し、平成16年度に向けては、より一層の会員皆さんのご協力を得ながら、事務局を友の会主導で充実させること、通信発送を担う広報グープの活動を支援していくこと、友の会入会パンフレットを新たに作成することをお伝えしました。昨年の反省を生かしてパソコンを利用した映像（パワーポイント）にまとめ、見やすく分かりやすい工夫をしましたが、如何でしたでしょうか。同封いたしました総会資料も、今後は見易いものに工夫して行きたいと思います。

ミューズ・フェスタ2004では、多くの会員がスタッフとして博物館職員と共に汗を流しました。詳しくは別の報告に譲りますが、特筆すべきこととして特別展示室の“友の会コーナー”のパネルや展示の仕方がグレードアップ！したことをぜひお伝えしたいのです。日頃お世話になっている学芸員の細やかな指導と、会員スタッフの熱心な学習と惜しみない努力で出来たものです。昨年度以上に学芸員やより多くの会員の皆さんと協働して実施できたことは、大きな成果だったと考えています。16年度も更なる発展を目指し、会員の皆さんのご協力に期待して友の会の運営に当たりたいと思いますので、どうぞ宜しくお願いいたします。　（友の会副会長　佐藤昭男）

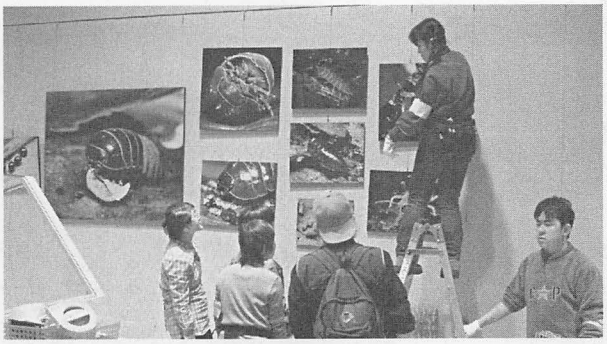
講演会・企画展
「きらわれものだヨ、全員集合！」を終えて

学芸員　出川洋介

ライブラリーの書棚に「ライブラリー日直日誌」というノートが保管されています。当初、日直当番の申し送り用のノートだったようですが、次第に学芸員の交換日記のようなものになっていきました。僕が就職したばかりの1998年6月15日の頁に「…将来、寄生虫の藤田紘一郎氏とか、ダ二の青木淳一氏とか…に来てもらって嫌われ者のミニシンポジウムを是非企画したい…」という書き込みをしました。当時、まさか青木先生が館長になろうとは思ってもいませんでした。6年を経て、今回実現に至った背景には、友の会の皆さんの存在も大きな支えとなっていました。

今回のきらわれもの講演会関連企画は去年10月に草案が決まり、実質的な準備は年が明けてからと、忙しい日程となりました。年度末に向けて博物館内も更に慌しくなり、準備期間には厄介なこともありましたが、皆さんから楽しかったという感想がたくさん寄せられ、本当にやって良かったと嬉しく思っています。講演会に加えて企画展まで盛り込んでしまったため、同僚学芸員達の忍耐強い助言・協力を仰ぎつつ、展示準備では友の会オープンラボのスタッフや博物館菌類ボランティアの皆さんに、連日朝から夜遅くまでお手伝いいただきました。この事業の開催は、友の会・ボランティアの協力なしには決して実現できなかったと思います。中心的役割を担って下さったスタッフの「大変ではあったが、勉強になりとても楽しかった。」という感想が心に響きます。演者の藤田先生、青木館長、企画展に協力くださった伊沢・皆越両先生はじめ、多岐にわたり献身的なご協力を下さった皆様にこの場をお借りしてお礼申上げます。

どなたも、学生時代に学校の文化祭に携わった楽しい思い出をお持ちではないでしょうか。去年から始まった開館記念日のミューズ・フェスタはまだ手探り段階にありますが、個人的には、これを年に一度の博物館の文化祭のようなものにしていけたら良いなと思っています。博物館の活動は、友の会やボランティアなど多くの方々に支えられていますが、日頃の一つひとつの活動は大変地道なものです。分野ごとに、それぞれの目標に向けた努力を続けているわけですが、将来、博物館に関わる友の会やボランティアの方々と館の全職員とが準備段階から協力して携わり、年に一度のハレの日の企画を実行できるような体制が整えられると良いと考えています。



一枚ずつ位置を確認しながらの飾りつけ

ミューズ・フェスタ2004報告：3月20,21日
企画展：3月20日～4月4日

今回は博物館との共催事業として参加しました。講演会の「きらわれものだョ、全員集合！」では、寄生虫の藤田紘一郎先生、ダニの青木館長、カビの出川学芸員が集合し、きらわれもだって人間生活に大切なのだ！とユーモアたっぷりに力説、企画展「きらわれものたちの意外な素顔」では、ユーモラスな写真にきらわれものたちも人気者になっていました。友の会コーナーでは「自然科学の扉を開く友の会」というテーマで、各分科会（事務局、広報グループ、サロン・ド・小田原、植物観察会、自然倶楽部、地学グループ、昆虫探検隊、オープンラボ）の活動をパネルや模型を展示して紹介しました。また、広報グループでは在庫の「自然科学のとびら」を販売、気合が入っていたためか、16年度予算収入目標を大きく上回る売上げでした。

友の会会員から昨年同様に協力スタッフを募集、何と！87名が事前準備から当日の作業、企画展最終日までミューズ・フェスタを盛り上げました。

絶えることない人、きらわれものの写真に驚きの声を上げる子ども……エントランスホールは普段の博物館に見られない熱気に満ちていました。その中で持ち場の作業をするスタッフひとり一人、生き生きとして実に頼もしかった！来年は博物館開館10周年、この友の会の勢いを、ホール一杯に響かせたいものです。　（事務局　中村恭子）

ミューズ・フェスタ2日間の記録

●来館者数（概算）4,500名
●常設展入場者数（チケット数）3,037枚
★友の会新規入会者数　16名
★自然科学のとびら　販売172冊、収益￥17,200

スタッフの感想から

☆親子でスタッフ参加。とても楽しい時間がもてて本当によかった。特に講演は最高に楽しく、あっという間でした。来年も楽しみ。

☆気持ばかりのお手伝いでしたが、なかなかの賑わいで嬉しくなりました。講演会も会場は一杯でしたね。帰りには古書や物産など重いほど買いました。

☆とても楽しく心膨らむフェスタでした。お手伝いできましたこと、感謝です。

☆博物館の入館者があれ程多いのを見たのは初めて。ミューズ・フェスタの力なのでしょう！これからの博物館は生き残りをかけて、どこも大変ですね。友の会の力を感じました。

☆生命の星・地球博物館の友の会やボランティアはスゴイね！（写真家伊沢正名氏/企画展）

ミューズ・フェスタに向けての準備

今年のフェスタでは、友の会の活動を広い場所で正式に発表できる事になり、そのためのパネル作りのノウハウも伝授してくださることが事務局より伝えられました。博物館が友の会を「良き相棒と認めてくださった証拠」と、とても嬉しく思いました。

見やすく格好良いパネルが作れるようにと、写真でも地図でも自作の絵でも、パソコン上で編集ができるソフトの操作を各グループ代表が教わり、グループに持ち帰っての作業が始まりました。会場で皆さんの目に留まった活動紹介パネルの出来は如何だったでしょうか。あの形にこぎつけるには、陰に瀬能・樽学芸員をはじめ多くの学芸員の献身的応援がありました。会場設定、大きい紙面のパネルの仕立て方、展示に必要な工作物の製作へのアドバイス・協力等など。

今回の作業を通じて、学芸員さんの展示物に対するプロ意識を知りました。博物館は展示を通じて、自然科学を理解していただく部分が大きいですから、展示物の内容とその装丁は最重要なことです。妥協を許さないその態度を私は頼もしく感じました。博物館は財政難、独立行政法人化と多難の時代ですが、こういう熱い職員の方々がいる限り、きっとこの博物館は新しい時代に適応できると自信を持ち、友の会全員で博物館を盛り立てる価値があると思いました。来年は自力で良い展示物を作って、今年の学芸員さんの苦労に報いたいと思います。　（友の会　赤堀千里）

博物館周辺の身近な自然シリーズ（その３）

博物館周辺の？身近な自然観察

学芸員　樽　創

私の担当は古生物（化石）なので「博物館周辺で化石採集・・・」としたいのですが、残念ながら博物館周辺で化石採集ができるところはありません。箱根湯本周辺で採集された記録がありますが、現在では不可能なので紹介できません。そこで、ちょっと切り口をかえた話題にしたいと思います。

１．身近な自然を観察しよう

皆さんの身の回り（自宅の周囲）には、おもしろい自然現象がたくさんあります。でも、多くの人は気付いていないでしょう。それを見つけるためには、じっくりと観察することが大切です。

私は化石だけに興味があるわけではありません。子供の頃は昆虫採集をし、展翅・展脚を行いました。また、哺乳類も好きで、獣医になりたいと考えていた頃もありました。今、専門分野は化石ですが、休日には昔の経験を生かし？身の回りの自然を記録しています。それほど一生懸命ではなく、気付いたときに気付いたことだけを記録しています。この記録を博物館で他の学芸員に見せると、分野によっていろいろな話を聞くことができます。私が博物館をおもしろいと感じるところは、こんなところにもあります。

今回は身近な自然観察について、手前味噌ですがちょっと自分のことを紹介しましょう。

２．どうやって観察する？

観察の方法は様々ですが、大事なことは証拠（標本など）を残すことと、記録を取ることです。自然観察で証拠を残すことは、後に誰かが検証するために非常に重要で、証拠が残されていなければ確認できません。そして、じっくりと観察してノートなどに記録しましょう。記録を残すことで、証拠が得られた状況をより詳細に残すことができます。自然のサイクルは1年（四季）なので、1年間どのような変化があるのか記録してみましょう。

３．対象は？

自然という言葉には、動物、植物、地質、気象など様々なものが含まれます。これらをすべてまんべんなく調べることは、非常に難しいものです。そこで、的を絞るのがいいでしょう。観察する対象はどのようなものでも構いません。大事なことは興味をもっていること、また手軽に続けられることを調べる対象にすることです。

４．どんな成果が出る？

集めた情報（証拠）を調べてみることで、身の回りの自然のある１面が見えてくるはずです。同じ情報でも調べ方によってわかることは様々です。調べ方がわからないときには学芸員に相談してみてください。いろいろな助言をしてくれるでしょう。

５．証拠はどうする？

採集した証拠はどのように管理したらよいでしょうか？　はじめは数少ない標本も、継続して集めればしまっておくことができないくらいの量になるでしょう。そんなとき“捨てる”なんてことは考えないでください。それよりも博物館などに預けてください。博物館に寄贈することで、博物館のコレクションの充実に貢献できます。そのときに大切なことは、いつ、どこで、誰が採ったのか、という記録を標本に付けておくことです。特に報告を行い（印刷物にする）、記録に残した標本は、できるだけ個人では所有せずに、博物館などに寄贈してください。なぜかって？記録として残された標本は、その後いつ誰から問い合わせがくるかわかりません。10年後、20年後かもしれませんし、さらに100年後かもしれません。国内だけではなく、海外からも連絡があるかもしれません。そんなときに標本を管理し、対応できるのが博物館です。記録に残った標本は自然を認識する上で貴重な証拠となるのです。ただし、寄贈しても標本が登録されない場合もあることを承知しておいてください。基本的にはすべての標本を同等に扱いたいのですが、かけらだったり、すでにたくさん標本があるときには、場合によっては処分せざるを得ないこともあります。

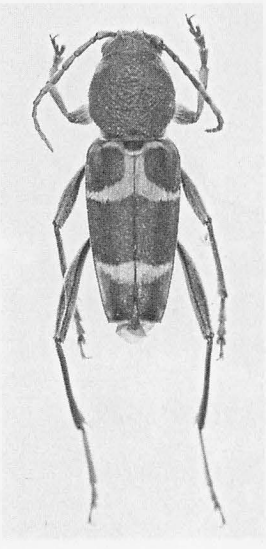


図１：採集したクビアカトラカミキリ．胸部が赤い．

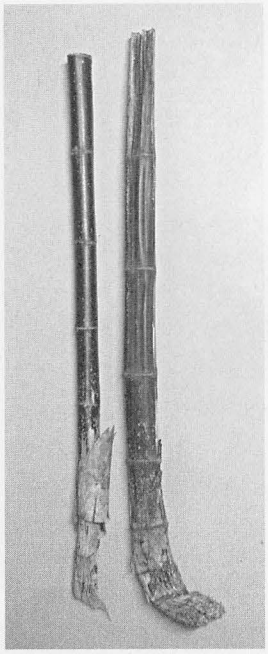


図２：採集した仙人杖．竹類寄生菌により黒色に変わったマダケ．約100cm.

６．役立った標本たち

残された標本は、学芸員の研究材料となることもあります。私が採集し、博物館に寄贈した標本のいくつかは、当館の学芸員によって報告されて記録が残されています。それらを紹介しましょう。

・昆　虫

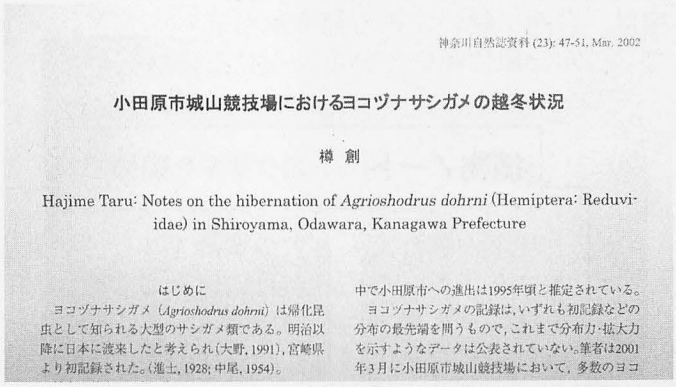
私の採集した昆虫標本がちょっとした報告に役立ちました。1996年に入生田で採集したヒラタクワガタ、1999年に湯河原町で採集したコカブトムシは、最近神奈川県内では確認されることが少なくなった種として苅部学芸員、高桑学芸員によって報告されました（苅部・高桑，2000）。2001年には、高桑学芸員の研究テーマの一つであるクビアカトラカミキリ（**図１**）を採集しました。この記録は報告されることになりました（高桑・堀井，投稿中）。

・菌　類

菌類の標本は、すべて出川学芸員に託し、博物館に寄贈しています。私自身は菌類について詳しいことは分からないのですが、おもしろいのは出川学芸員の話を聞くことです。ですから現在はもっぱら標本の蓄積に努めています。標本を蓄積することで、調査地域の菌類相を明らかにすることができるでしょう。そして私が採集した仙人杖（**図２**）は、出川ほか（2004）の中で報告されました。

・自分でも

私自身も専門としている化石以外の分野で報告を行いました。それは、外来種であるヨコヅナサシガメの記録です。1996～97年にかけて小田原市内でヨコヅナサシガメを採集しました。この記録は県西部の比較的早い記録にあたり、高桑ほか（1998）で報告されました。生物の初めてあるいは早期の記録は、よく報告されるのですが、その後どのように変化したかといった報告はあまり多くないようです。ヨコヅナサシガメについても同様で、分布が確認された後、どのようなペースで増加するのか不明でした。たまたま2001年に小田原市の城山競技場周囲の樹に、多くのヨコヅナサシガメの幼虫が越冬しているのを発見したので、その状況を調査しました。結果は、城山競技場の周りだけでも約400頭が越冬しているというものでした。この状況を2002年の神奈川自然誌資料に投稿しました（樽，2002：**図３**）。



神奈川自然誌資料 (23): 47-51, Mar. 2002

小田原市城山競技場におけるヨコヅナサシガメの越冬状況

樽　創

Hajime Taru: Notes on the hibernation of *Agrioshodrus dohrni* (Hemiptera: Reduviidae) in Shiroyama, Odawara, Kanagawa Prefecture

はじめに

ヨコヅナサシガメ（*Agrioshodrus dohrni*）は帰化昆虫として知られる大型のサシガメ類である。明治以降に日本に渡来したと考えられ（大野，1991），宮崎県より初記録された（進士，1928；中尾，1954）。

中で小田原市への進出は1995年頃と推定されている。

ヨコヅナサシガメの記録は，いずれも初記録などの分布の最先端を問うもので，これまで分布力・拡大力を示すようなデータは公表されていない。筆者は2001年3月に小田原市城山競技場において，多数のヨコ

図３：ヨコヅナサシガメの報告（神奈川自然誌資料より）．

７．おわりに

身の回りの自然観察について、自身の例を紹介しました。博物館周辺ではありませんが、私が主に記録をとっているのは小田原市内ですので、大目に見てください。皆さんの周囲にも、おもしろい現象があるでしょう。ちょっと注意して観察すると見つかるかもしれません。

文　献

出川洋介・正木照久・井上幸子・太田順子，2004．小田原市周辺より発見された仙人杖について．神奈川自然誌資料，（24）：79-80

苅部治紀・高桑正敏，2000．県博関係者が採集した興味ある甲虫類．神奈川虫報（132）：54.

高桑正敏・浜口哲一・槐　真史，1998．神奈川県内におけるヨコヅナサシガメの分布拡大．神奈川自然誌資料（19）：75-77.

高桑正敏・堀井邦弘，投稿中．南部フォッサマグナ地域におけるクビアカトラカミキリの分布拡大現象．月刊むし．

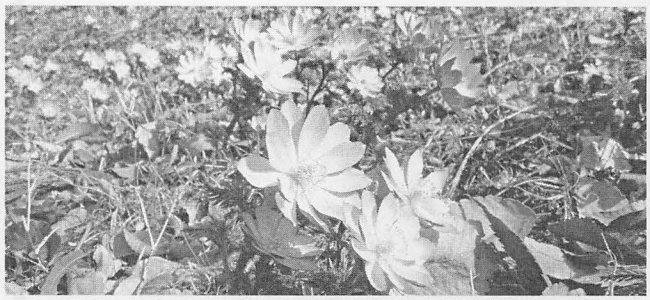
樽　創，2002．小田原市城山競技場におけるヨコヅナサシガメの越冬状況．神奈川自然誌資料（23）：47-51.

第 15 回植物観察会　七沢と鳥屋　2004. 3. 10
『初めての観察会』

天気は上々。良く晴れて暖かく、遠足気分で出かけました。初めての参加なので、バスから降りたとたんに、皆さんが本を出したり、虫めがねや双眼鏡を出したりするのを見てタジタジとなってしまいました。

それでもクヌギ、コナラとイヌシデの見分け方を教えてもらい、これなら私にも分かりそうだと、「コナラ、クヌギ」などと言いながら歩きました。少々間違っても樹は文句を言うまい。いいなあ、樹は。自然に咲いている福寿草もとってもきれいで、こんな風に咲いているのを見るのは初めてです。細かなところに何も気付かない私ですが、マイペースでまた参加したいと思いました。

（根本順子）



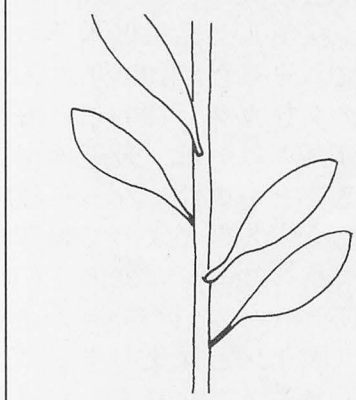
福寿草

植物ノート　コクサギを眺めて

昨年の暮れ友人と大山聖峰を歩いていたら、葉を落としたコクサギがたくさん目に付きました。枝にはすでに種子を飛ばした果実がついていました。果実のついた枝を一枝持ち帰り花瓶に挿しておきました。

コクサギは観察会でいろいろと話題になる植物です。話題の一つにコクサギ型葉序というのがあります。葉のつき方が少し変わっていて、左右２枚ずつついているように見えるのです。

さて、花瓶に挿したコクサギを眺めていたら、枝は左右に交互に出ています。葉の葉腋に冬芽がつくので、枝も葉と同じように左右に２本ずつ出ているのかと思ったら、そうではないようです。なぜ枝は葉のつき方と違って左右に交互になっているのかなと思いました。



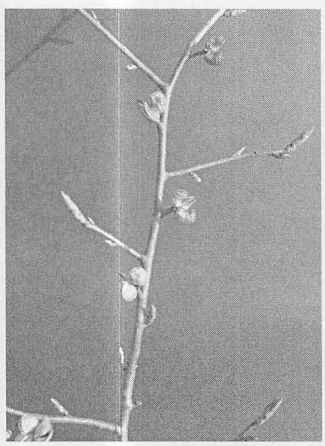
コクサギ型葉序

そこで、昨年の葉の落ちた痕（葉痕）を調べてみました。すると、一年前の葉痕は伸びた枝の基部と，その下についている果実の枝の基部に見えました。コクサギ型葉序といわれる２枚ずつついている葉の、上の葉腋には葉芽がつき、下の葉腋には花芽がついているのです。そのため枝は葉と違い左右に交互についているように見えたのでした。

３月に入り、コクサギの冬芽がほころび始め、大きさに違いが出てきました。左右に２個ずつついていた冬芽は上側のものは大きく葉芽で、下側のものは小さい花芽で、まるで、葉芽と花芽が１組になっているようです。

今回観察した枝は雌株でしたが，雄株ではどうなのでしょう。この春の観察のテーマに加えてみてはいかがでしょう。

（佐々木あや子）



枝が交互に出ている

近況報告や活動紹介をお寄せ下さい！

皆さんが博物館や地域で活動されている様子を事務局にご紹介下さい。友の会通信に掲載させていただき、会員の“輪”を広げて行きたいと思います。

新しい発見や学芸員への質問等も、こちらへどうぞ！

東伊豆単成火山地形観察会　2004.1.18

山には雪、海には浮かぶ島々、龍でも降りてくるのではと思う神秘的な空。1月18日東伊豆単成火山地形観察会です。

最近、気象庁の活火山の定義が変更され、伊豆東部火山群が改めて活火山として認定されたそうです。1989年に伊東沖で海底噴火が起き、手石海丘と呼ばれる海底火山が誕生したことでまさに活火山であることが証明されたと萬年先生のお話でした。これからも同じような噴火が繰りかえされるのでしょうか。

城ケ崎海岸の富戸で大室山火山から流出した溶岩が数メートルの厚さで海岸に迫り柱状節理を成していた。大室山からの総噴出量は、約五億トンとか。

単成火山の大室山は、5000年前の噴火によりできたスコリア丘。噴火様式は弱く高く上がらないので火口から噴出される火山岩塊と火山礫のほとんどがそのまわりに落下して安息角(約30)の円錐形の丘が出来るのだそうです。スッキリときれいな山です。駐車場付近では、上部表面にクリンカーがあるアア溶岩を観察しました。

積雪のため岩の山、筏場方面東伊豆単成火山を離れ、伊豆半島の基盤である白浜層群の観察のため爪木崎へ。おりしも水仙祭りの最中祭り太鼓のお出迎え。

ここには500万年前にマグマが噴出してできた柱状節理があり、安山岩の角柱で俵のような形から地元では俵磯とよばれているそうです。近くに他と違い薄緑色の凝灰岩質の露頭があり観察。いろいろの大きさの粒を含み層になったところもありました。もとは白っぽかったが浅い海の火山噴火の噴出物で熱水の影響をうけ薄緑色になったのだろうと山下先生。石英、黄鉄鉱、黄銅鉱がみられました。

白い砂の風紋、碧い海、すばらしい景観です。

溶岩（白浜層群）の柱状節理（下田市爪木崎）

白浜層群（500万年～200万年前）で300万年前の石灰質の有孔虫の化石や貝殻などが堆積されている白浜海岸のシェルベットの観察です。中粒砂で堆積構造に流れがあり貝殻が密集し、波の影響を受け淘汰されているので、浅い海での火山活動によるものでしょうとの田口先生の露頭印象のお話でした。ヒヨク貝(ホタテの一種)のロクの数やミミの幅などによっても年代が推測できるというお話で何千万、何百万年前の世界が少し身近になりました。美しい景観も温泉も火山活動の存在があっての恵みなのですね。

帰りのバスの中で東伊豆単成火山の火口の配列とプレートの動きの関係について。伊豆半島はフィリピン海プレートに乗っているが、東伊豆は丹那断層を境にして違う方向に動いていて真鶴マイクロプレートの考えもあるとか。

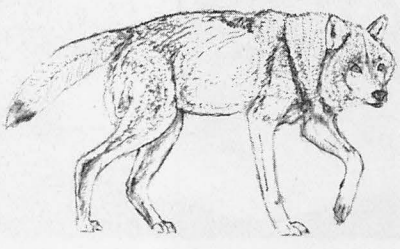
最後に萬年先生が東伊豆単成火山地形観察会又の日にリベンジをとおしゃっていました。前日の雪でどうなることやら…と。観察会初めての参加でした。現地でお話をうかがうとすっかりわかったような気になり興味が湧いてきます。大室山の火口他、東伊豆単成火山の観察ができなかったことがとても残念でした。それにしても、変更にもかかわらず1日を堪能出来ました事、先生方の力量に感心いたしました。

（友の会　長谷川洋子）

第59回サロンド小田原　2004.3.4
先の見えないニホンオオカミ研究　：演者　中村一恵（元学芸部長・非常勤学芸員）

絶滅したオオカミに対する一般の関心は高い。最近では、1910年に福井県松平試農場で射殺されたオオカミが、ニホンオオカミの最後だという新聞記事が世間を賑わした。

従来1905年奈良県吉野郡東吉野村鷲家口（わしかぐち）で捕獲されロンドン自然史博物館に剥製保存されている若い♂の個体が最後のニホオオカミとされていたゆえに話題となったものである。

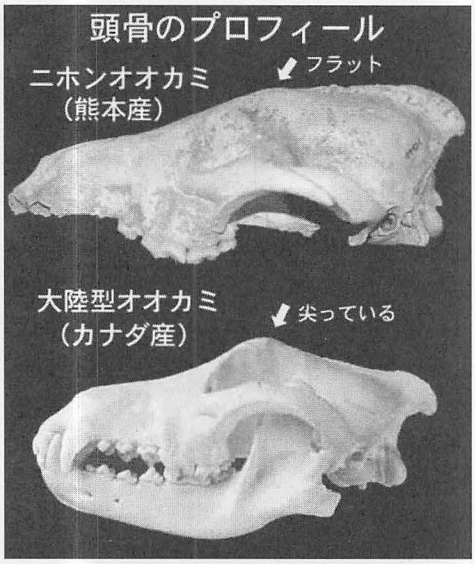


オオカミ（イラスト：中村一恵）

帰化動物の権威であり、鳥類研究を専門とする動物学者である中村さんは哺乳動物の中でもオオカミが大好き、ニホンオオカミのロマンを求めた数々の研究がある。また世にオオカミファンは多くその研究も多々ある中で98年開催の特別展「オオカミとその仲間たち」はそれなりのオリジナリティをもって臨んだ催しであった。ところがその後今日に至るまで、新たな視点が見えてこない。それはなぜか。数々の魅力ある研究テーマがありながら、研究に困難が伴うのはニホンオオカミが絶滅し、生態、食性、行動など生きた動物からしか得られない情報が消えてしまった絶滅の重みによる。これが今日のタイトル「先の見えない…」であり、また結論でもあった。

ニホンオオカミは信仰や魔除けの対象であったことから、とくに神奈川県秦野地方に多くの標本があるが、その大部分は個人所有であり、しかもさまざまな用いられ方をしてきたために資料として不完全なものが多く、また分類上重要な雌雄の区別が分からない欠点がある。フラットな頭骨プロフィールは大陸型と違った特徴であるが、これについても雌雄による差異かどうか、論文にまとめることは難しい。

分類を困難にしているもう一つは分布域の広さである。オオカミの分布は、現在はヨーロッパの一部と北米大陸に極限されるオオカミの分布だが、19世紀には中米の一部を含む北米からインド・中東・地中海を含むユーラシア全域に渡り、ヒトを除けば世界でもっとも広い分布域をもっていた。それ故に地域的な変異も大きく、中でも閉塞された島国では変異が大きいのでニホンオオカミが独立種であるのか、地域的変種なのか今もって分からない。



オオカミの頭骨比較
特別展図録「オオカミとその仲間たち」より

シーボルトが持ち帰ったオランダ・ライデン王立博物館のニホンオオカミのタイプ標本を含めた歯冠長によるオオカミ、化石オオカミ、古代イヌ、ジャッカルの裂肉歯のサイズの比較では、北に行くほどサイズが長くなる（寒冷地ほど餌となる動物が大きくなる）傾向を示しているが、イヌ属が進化してきた第四紀は気候変動の繰り返しが多く、それに合わせ歯冠長が変化することもあって決定打とはなり得ない。

イヌ属の頭骨全長と歯冠（裂肉歯）長を変数とした図表に示された全長がほぼ同じのイヌ（*Canis familiaris*）とオオカミ（*Canis lupus*）の歯冠長の明瞭な差はイヌかオオカミかを判別する決め手の一つ指標にはなる。また前後長と頬舌径の比較図上、地質時代・歴史時代の個体が回帰直線上に乗る事実は、氷河期以後の温暖化に伴う小型化の傾向が読みとれる優れた業績ではあるが、元々大型種と小型種があってそれが羅列されているのではないかという反論に対して明瞭な答えがないという欠点がある。このようなわけからオオカミ研究の将来はかなり深刻で、宗旨替えをしなければならないかと案じている。

最後に、900万年前のイヌ属の発生から1万年前のオオカミ種に至る進化史の紹介、ロマンを求めて訪ねた頭骨発見地茨城県上野村「生犬（おいぬ）穴鍾乳洞」訪問記と豪華景品付きクイズで私たちの関心を盛り上げてくださった。オオカミに関する皆さんの関心度はいかがだろうか。因みに正解者はたった3名であった。

Q1：現在、世界中に何頭のオオカミが生息しているか？〔1万頭、5万頭、10万頭、50万頭、100万頭から選択〕

Q2：オオカミが最も多い地方は次のどこか？〔アラスカ（合衆国）、カナダ、グリーンランド、中国、インドから選択〕

Q3：日本にはまだオオカミが生息していると思いますか？〔思う、思わない〕

Ans.　10万頭、カナダ、どちらでもよい

〔出席者42名　茶話会31名〕

（サロン担当　蛯子貞二）

行事予定

〈第60回 サロン・ド・小田原〉
～アオバトのふしぎ（仮題）～

日　時：５月８日（土）受付 16:30～
講　演：17:00～18:00（１階西側講義室）
茶話会：18:00～19:30（１階東側講義室）
演　者：こまたん
対　象：友の会会員・一般　ご友人や活動のお仲間も、この機会にぜひお誘い下さい。
参加費：1,000円/人　（講演会のみは無料）
申込み：講演会は申込み不要。茶話会に参加の方は普通はがき、FAX、Eメールで事務局へ。
締切り：５月７日（木）
駐車場：博物館裏第２駐車場をご利用下さい。
問合せ：田口学芸員まで　0465-21-1515
tagu@nh.kanagawa-museum.jp

演者紹介　「こまたん」は、大磯町の高麗山周辺で活動していた探鳥会の略称。後に探鳥会を中心に様々な活動を行っているグループの名前になった。「アオバトは波に飲み込まれる危険を冒してまでなぜ海水を飲みに来るのか？」という疑問からすべてが始まった・・。大磯の照ヶ崎での１５年にわたる地道な調査から、アオバトの謎や疑問について解き明かしてくれます。ご期待下さい！

〈自然倶楽部〉
早川水系の文化と歴史探訪　Part4
～博物館周辺の身近な自然観察会～

日　時：５月２２日（土）9:30～15:30
場　所：入生田～長興山～塔の峰～阿弥陀寺～箱根湯本（小雨決行）
講　師：新井学芸員、勝山学芸員、関口康弘（友の会）**詳細は同封のチラシをご覧下さい。**

〈オープンラボ〉
公開講座～土の中の虫ウォッチング～

日　時：６月５日（土）６日（日）10:00～15:00
場　所：博物館周辺と博物館３Ｆ実習実験室
講　師：当館館長　青木淳一先生
詳細は同封のチラシをご覧下さい。

〈オープンラボ〉スタッフ企画会議・勉強会

日　時：５月２２日（土）10：00～15：00
場　所：午前野外観察（雨天でない場合）
午後企画会議・３Ｆ実習実験室

〈17回　植物観察会〉
～箱根にコアジサイの香りを求めて～

日　時：６月１日（火）　雨天時６月２日（水）
9:30～15:00頃
集　合：湯本駅改札口
コース：小涌谷温泉―千条ノ滝―浅間山―湯坂路入口（各自バスで湯本へ）
講　師：勝山学芸員
参加費：900円（行きのタクシー代を含む）
申込み：普通はがき。初参加の方その旨記入。
締切り：５月１０日
持ち物：弁当、水筒、雨具　あればストック
参　考：小涌谷温泉までタクシーで。石畳が滑りやいので気をつけて下さい。
問合せ：土屋昌利　[illegible]
寺井京子　[illegible]

〈地学グループ〉
～鎌倉地質観察会１～

古都鎌倉の、ハイキングコースで見られる地層を観察しながら歩きます。今回は主に不整合等層序を勉強し、化石は次回の予定です。
日　時：６月５日（土）雨天中止（40%ルール）
10:00～15:00頃
集　合：横須賀線北鎌倉駅前
コース：北鎌倉駅－化粧坂－源氏山－銭洗弁天－横須賀線鎌倉駅
講　師：蛯子貞二（友の会）、山下浩之（学芸員）、田口公則（学芸員）
対　象：一般、定員は設けません
参加費：100円／人（保険料、資料代）
別途、当日使用する資料として、鎌倉の１万分の１地質図、断面図を頒布します。(400円)
申込み：普通はがき
締切り：５月２４日まで
地質図は部数用意のため申込みはがきに必要部数を併記して下さい。
問合せ：新藤誠一郎　[illegible]

〈夏休み昆虫探検隊〉

日　時：７月30日（金）、31日（土）
場　所：長野県高遠付近
２日間借り上げバスで移動します。
詳細は次号の通信に掲載します。

行事への参加申込み方法

・受付は　各行事案内の申込み方法に従って、普通はがき、または往復はがきで。

・記入は　企画名／会員番号／参加者全員の氏名／性別／年齢／代表者の住所、電話番号を明記、各行事案内に指定の記載事項もご記入ください。

・宛先は　[生命の星・地球博物館　友の会事務局]宛てにお送りください。

＊＊＊＊　 　**情報クリップ**　＊＊＊＊＊

会員状況　H16. 3.31 現在
個人 307 名、家族 148 世帯
内新規会員　43 名

★★★ 会員特典が充実しました！

この４月から、館内レストラン「フォーレ」の利用が１０％割引になります。券売機でチケットを購入せず、カウンターで従業員に会員証を提示して下さい。

★ 会費の支払はお済みになりましたか？

H16 年度の会費支払がまだの方は、お早めに。個人 1500 円、家族 2000 円、振込み手数料をご負担いただくことになっていますのでお間違いないよう！総合案内カウンターでも受付けます。

★ 友の会活動紹介コーナーがお目見え

ミューズ・フェスタ 2004 での力作パネル《友の会活動紹介》を、２Ｆライブラリー入口の友の会コーナー（仮説）で継続展示します。ぜひご覧ください。「友の会って何をするの？」が分かり、あまり馴染みのないの分科会の活動も、「へぇ～面白そう！」と観察会や講座に参加したくなること請け合いです。

博物館職員の異動

平成 16 年４月１日、副館長ならびに友の会に係わる方の異動を報告いたします。（敬称略）

副館長　転入：長島　敏雄（前教育部担当部長）
　　転出：大曽根　俊久（県立総合教育センター）
企画普及課　転入：中島　功（前県立伊勢原高校）
　　転出：関口康弘（県立伊志田高校）
担当異動　企画普及課友の会担当　奥野花代子　→　新井一政、鈴木　由美　→　継続
　　学芸部友の会担当　　田口公則、佐藤武宏　→　なし
※　学芸部友の会担当は、今年度から設置しないことになりました。

＊＊

次回の通信発送日は、6 月 26 日(土)、10 時から、会議室です。

編集後記：広報Ｇ第１段、試行錯誤の通信です。ご感想、ご意見をお寄せ下さい。

発行：神奈川県立生命の星・地球博物館友の会
編集：友の会広報グループ
〒250-0031　神奈川県小田原市入生田４９９　　TEL：0465-21-1515　FAX：0465-23-8846
Ｅメール：tomonokai@nh.kanagawa-museum.jp
交通：箱根登山鉄道（小田急線箱根湯本行き乗入れ）入生田（いりうだ）駅下車３分
　　駐車場は地下（16:30 で閉門）と博物館裏屋外第２駐車場の２箇所

R100 この本は、再生紙(古紙 100%含有)を使用しています